

	[10]
氏名	にしかわ かずじ 西川 一二
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第17号
学位授与の日付	平成28年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	個人特性としての好奇心の領域とタイプについて — 知的好奇心と対人的好奇心 —
論文審査委員	主査教授 雨宮俊彦 副査教授 田中俊也 副査教授 清水和秋

論文内容の要旨

好奇心は、科学、ビジネス、教育などの領域での達成に関わる人間特性として広く関心をもたれている。例えば、アインシュタインは、自らの才能について問われ、「わたしには、特殊な才能はありません。ただ、熱狂的な好奇心があるだけです。」と答えている。日本人のノーベル賞受賞者である山中教授と赤崎教授も、2016年に行われた対談で、研究において最も重要な資質を問われ、そろって好奇心をあげている。また、フラット化する社会で有名なジャーナリストのフリードマンは、2013年の著書でこれからのビジネス社会で成功していく要因としては、知能や感情能力よりも、好奇心がより重要であると主張している。教育の領域でも、雑誌「児童心理」における2011年の好奇心特集号に示されるように、好奇心への関心は高い。

心理学における好奇心研究は、James に始まる。James は1890年に刊行された”The Principles of Psychology”において、好奇心を新奇な対象に対する接近と探索を動機づける本能としてとらえ、新奇な対象からの回避を動機づける不安と拮抗する役割を担っているとした。さらにJamesは、人間には単なる新奇な刺激への反応としての好奇心だけでなく、知識のギャップや矛盾に反応しこれを解消しようとする別のタイプの好奇心もあることを指摘した。Jamesによる2タイプの好奇心説は、行動主義の時代を経た、1960年代における内発的動機付け研究の時代になって、Berlyneによって実証的な研究として展開されることになる。Berlyneは、知的好奇心が動機づける探索行動を拡散的探索と特殊的探索の2タイプに分けた。拡散的探索は、特定の目標を定めずに新奇な情報を幅広く求める探索行動であり、特殊的探索は特定の対象に目標を定めて行う探索行動である。

Berlyneによると、2タイプの探索行動は状況の変化と連動して展開していく。例えば、読書する際の行動において、刺激に乏しい状況で退屈して新奇な対象を求め、たまたま手にした推理小説を読もうとする行動が拡散的探索にあたる。いったん推理小説を読み始め、その内容やストーリーに疑問を持ち、未知の点や矛盾を解消しようと理解するまで何度も読み直し内容を精査する行動が特殊的探索にあたる。以上のような探索行動の2タイプと

それらが生起する状況の特徴などに着目し、知的好奇心の2タイプとしての拡散的好奇心 (diversive curiosity) と特殊的好奇心 (specific curiosity) が定式化された。拡散的好奇心は、新奇な情報や知識を求めて方向性を定めず探索行動を行うことを動機づける。一方、特殊的好奇心は、矛盾あるいは情報の不整合に対して、方向性を定めて探索行動を行うことを動機づける。

Berlyne による定式化を受け、拡散的好奇心と特殊的好奇心に関する一連の実験的研究がなされ、また個人特性としての測定も試みられるようになった。個人特性としての拡散的好奇心が強い人は、新奇で多様な情報を積極的に求める傾向があり、個人特性としての特殊的好奇心が強い人は、不整合や矛盾に敏感で、それを解消しようと積極的、持続的に取り組む傾向があることが指摘されている。欧米では、個人特性としての好奇心に関して、知的好奇心尺度を含め多くの尺度作成が行われてきている。

以下、本論文の概要について紹介する。

本論文は、「第Ⅰ部：好奇心研究の概観」、「第Ⅱ部：好奇心尺度の作成」、「第Ⅲ部：特性知的好奇心の2タイプと状態との関連」、「第Ⅳ部：総合考察」の四部から構成されている。

第Ⅰ部「好奇心研究の概観」：心理学における好奇心研究が概観され、研究の目的が提示されている。

第1章「好奇心研究の発端」：好奇心研究の背景として、Hullの動因低減説および外発的動機づけと内発的動機づけ論争をきっかけとした Berlyne (1960) の好奇心研究が紹介されている。また、日本における唯一の好奇心研究といえる、波多野・稲垣 (1971) の認知的動機づけ理論が紹介されている。

第2章「好奇心の個人差研究」：Berlyneの動機づけ研究にもとづく好奇心の個人差研究が紹介されている。特に Day (1969)、Spielberger & Starr (1994)、Litman (2005) などにおける知的好奇心尺度作成の研究が紹介されている。また対人的好奇心 (Litman & Pezzo, 2007) や精神的健康と関連した好奇心 (Kashdan et al., 2009) に関する尺度研究についても紹介されている。

第3章「研究目的」：1章、2章における好奇心研究の展望を踏まえて、本論文の4つの研究目的とその理由が述べられている。

①知的好奇心尺度の作成：欧米では、知的好奇心の2タイプを測定する尺度はあるが、下位尺度の弁別的妥当性に関する問題点が指摘されている。そのため、本研究では、既存の欧米の尺度の日本語版ではなく、Berlyne (1960) と波多野・稲垣 (1971) に依拠してあらたに知的好奇心尺度の作成が行われている。

②対人的好奇心尺度の作成：知的好奇心とは明確に領域の異なった好奇心に対人好奇心がある。本研究では、Litman & Pezzo (2007) を参考に、対人的好奇心尺度の作成が行われている。

③CEI-II日本語版の作成：Kashdan et al. (2009) は、日常生活や人生における中長期的な好奇心の個人差に関する尺度 (CEI-II) を開発し、心理的 well-being との関連を見出した。本研究では、Kashdan et al. (2009) の CEI-II の日本語版が作成され、心理的 well-being との関連が検討された。

④知的好奇心の2タイプにおける特性と状態との関連の検討：特性知的好奇心の2タイプ

の個人差と状態的好奇心との関連を検討した研究はほとんどない。本研究では、画像刺激に対する認知的評価と気分評定や再認課題を行い、状態好奇心と特性知的好奇心の2タイプにおける個人差との関連についてマルチレベル分析を使用して検討されている。

第Ⅱ部「好奇心尺度の作成」：知的的好奇心尺度、対人的好奇心尺度、日本版好奇心探索尺度が作成されている。

第4章「知的的好奇心尺度の開発」：知的的好奇心の2タイプである拡散的好奇心と特殊的好奇心を測定する尺度の開発が行われた。大学生816名を対象とした予備調査を行い、50項目の項目プールから12項目を選定し、知的的好奇心尺度が作成された。次に大学生566名を対象とした本調査が行われた。研究1では、因子分析の結果、各6項目からなる2つの因子が抽出され、各因子の項目内容は、拡散的好奇心および特殊的好奇心の特徴と一致することが確認された。2下位尺度の内的整合性は、十分な値($\alpha_s=.81$)を示した。研究2では、知的的好奇心尺度の妥当性が、Big Five尺度、BIS/BAS尺度、認知欲求尺度、認知的完結欲求尺度と曖昧さへの態度尺度を用いて検討されている。相関分析と回帰分析の結果、拡散的好奇心と特殊的好奇心の共通性と対比について、理論的予測とほぼ一致する結果が得られた。

第5章「対人的好奇心尺度の作成」：研究1では、人に関する情報の種類として、感情、秘密と属性の3つが仮定され、計20項目からなる尺度が作成された。大学生195名を対象とした因子分析の結果、3因子が抽出され、感情に対する好奇心($\alpha=.86$)、秘密に対する好奇心($\alpha=.81$)、属性に対する好奇心(属性 $\alpha=.74$)と命名された。これにもとづき3下位尺度、各5項目計15項目からなる対人的好奇心尺度が作成された。研究2では、対人的好奇心尺度の妥当性を検討するため、知的的好奇心尺度、Big Five尺度、刺激希求尺度、多次元共感性尺度と社会的スキル尺度との関連が検討された。分析の結果、感情に対する好奇心では、他者の気持ちや考えに立って人へ接近する傾向が示された。秘密に対する好奇心では、他者からの影響を受けやすく衝動的かつ情緒不安定な傾向が示された。一方、属性に対する好奇心では、感情と秘密の中間的な傾向が示された。

第6章「好奇心の精神的健康との関連」：好奇心と精神的健康との関連を検討するためにCEI-II(Kashdan et al.,2009)の日本語版として日本版好奇心探索尺度が作成された。研究1では、CEI-IIを翻訳した項目の因子構造について検討がなされた。大学生824名を対象とした因子分析の結果、オリジナルとほぼ同じ2因子が抽出された。下位尺度は各4項目あり、伸展型好奇心($\alpha=.82$)、包括型好奇心($\alpha=.74$)と命名された。研究2では、日本版好奇心探索尺度の妥当性および、精神的健康との関連を検討するため、Big Five尺度、主観的幸福感尺度、認知的完結欲求尺度を使用し、相関分析が行われた。その結果、伸展型好奇心は計画性や誠実性の高さと、包括型好奇心は状況を受容し自己を調整する能力の高さや社交性の高さと、関連しており、好奇心探索尺度で測定される2タイプの好奇心が、それぞれ、やや違った経路を通じて精神的健康と心理的well-beingに影響することが示唆された。

第Ⅲ部「特性知的好奇心の2タイプと状態との関連」：特性知的好奇心の2タイプの個人差と状態好奇心の関連について、マルチレベル分析を使用して検討がなされた。

第7章「特性好奇心の2タイプにおける認知的評価と気分との関連」：大学生130名を対象に、20枚の画像について理解不可能性、ワクワク感(状態好奇心)とモヤモヤ感(混乱)

の評定が求められた。マルチレベル分析の結果、各調査対象者の特性拡散的好奇心や特性特殊的好奇心の高さによって、画像評定の理解不可能性がワクワク感やモヤモヤ感に異なる影響を与えることが示された。

第 8 章「特性好奇心の 2 タイプにおける行動傾向の調査」: 画像の色の再認率に対する、知的好奇心の 2 タイプの影響が検討された。調査対象者は大学生 93 名だった。新奇性の高い画像の再認課題の再認率に関して、特性拡散的好奇心との関連が示された。

第 IV 部「総合考察」: 本論文での研究結果が総括され、今後の課題、特に知的好奇心の応用的問題に関して検討されている。

第 9 章「好奇心のタイプと領域について」: 本研究で行われた尺度作成と妥当性の検討をふまえ、好奇心のタイプと領域について検討されている。

第 10 章「知的好奇心研究の応用的展開」: 本研究の中心となる知的好奇心尺度に関して、教育場面を中心に今後の応用的展開が議論されている。

論文審査結果の要旨

好奇心については、欧米の心理学では James を引き継いだ Berlyne 以降、現在にいたるまで、動機付け、個人差、感情と多面的に研究が積み重ねられてきている。一方、日本の心理学では、内発的動機付けとして一般的な注目はされているが、具体的な研究については、波多野・稲垣(1971)の先駆的な業績以外には、ほとんど研究がなされていない。好奇心の個人差に関する尺度研究もほとんど存在しない。

以上のような状況において、本論文では、欧米における好奇心の個人差に関する尺度研究が丹念にレビューされ、好奇心に関する三つの尺度が新たに作成されている。日本版好奇心探索尺度は翻訳版で、知的好奇心尺度と対人的好奇心尺度は新たに開発された尺度である。本論文での知的好奇心尺度は、欧米の知的好奇心尺度において課題となってきた、下位尺度の弁別的妥当性の低さの問題もクリアしている。対人的好奇心尺度を初めとして、妥当性の確認は今後の課題として残っているが、本論文で作成された好奇心尺度は、日本における実証的な好奇心研究の再出発に寄与することが期待される。

好奇心は、動物にも共通な最も基礎的な動機付け、感情であると同時に、高次の認知にも関わる多面的な現象である。興味や刺激希求といった密接に関連する問題領域も多い。また、科学や教育、精神的健康に寄与するだけでなく、犯罪にも関わるような病的な好奇心も存在する。こうした多面的な好奇心については、欧米の第一線の好奇心研究者である Silvia や Kashdan など、現時点ではその全体像はとらえられがたいと書いている。本論文は、そうした状況のなかで、知的好奇心の二タイプという Berlyne 以来の中核的テーマを軸に、対人的好奇心、好奇心と心理的 well-being、状態と特性の関連といった周辺的な問題へもアプローチしている。そのため、領域とタイプとして設定された本論文の問題の全体像に明確でないところが残り、また、状態と特性の関連の分析についてはまだ試行的な段階にとどまっている。しかし、中心となる達成は明確であり、周辺の課題についても今後の展開の拠点は構築できたとと言えるだろう。

平成 28 年 1 月 23 日、各審査委員出席のもとに、論文提出者に対し、論文内容及びこれに関係する事項について試問および公聴会を行った。本論文の中心となる結果や今後の課

題に関連して、質疑が行われ、論文提出者は、指摘された問題について、概ね的確な応答を行った。よって、審査委員一致して、合格と判定した。